
流雪

うすしお

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流雪

【Nコード】

N7880P

【作者名】

うすしお

【あらすじ】

雪が降るとき、世界は静寂に包まれる。

そこに身をおいたとき、否応なく自分の存在について思いを巡らすにはいられなくなる。

——『存在』だって？

——それはほんとうに確かなもの？

深夜。ふと目を覚ます。

冷気が部屋の隅々までを、余さず浸食していた。この身体を取り囲み首筋を撫でながら、冷たいその手を布団の中へとねじ込もうとしている。

次第に目がさえてくる。寒さが容赦なく頬を叩くから。

物音ひとつしなかった。耳が痛くなるほどの静けさ。毛布をはねのけた。起き上がるときの布ずれの音さえも、かすかに聞こえ、だがすぐに消えた。

窓のそばに寄り、カーテンをずらした。雪が降っている。

静寂の理由を理解した。ふわふわと柔らかく降り積もる雪が、その柔らかさゆえに、あらゆる音を反響させることなく、その身に吸い取っているのだ。

「――雪」

つぶやいてみた。そんな小さな声さえも、舞い散る雪達が、あっという間によつてたかつて食い尽くした。

窓を開けた。窓枠に薄く積もった雪の粒は、さらさらとした手触りだった。だがその感触も、すぐに手のひらの熱が融かし消してしまふ。

体温を、生命を恨んだ。雪と同化し、さらさらの粒子となってしまいたかった。

空を仰いだ。底のない深い暗闇から、際限なく雪が生まれ続けている。虚空から吐き出され、ただ静かに降り積もる雪は、視界の下から順に白い色を塗り重ねていった。この世をモノトーンで染め抜いていく。すべての音を消していく。

目を覚ました。

翼の影で休んでいる間に、どうやら眠ってしまったらしい。

太陽は天頂を少し過ぎたところに位置していた。影から顔を出すと、照りつける強烈な日差しに目がくらむ。頭を振って、さっきまで見ていた夢を思い出そうとした。おぼろげに、ただ何となく覚えている。自分の部屋にぼくがいる、そんな夢だったと思う。そして状況は今とほとんど同じようなものだっただけだ。暑さと、さらさらした手触りの砂粒と、喉の渇き。それから静寂。

水がもう無くなりかけている。こんな砂漠の真ん中で、水が尽きるといふことはいったいどういうことなのか、もちろん理解している。一度は探したキャビンやコックピットやカーゴの中を、汗だくになりながら再び見て回った。だがもはや一滴の水さえ見つからなかった。

小型機だとは言え、墮ちる寸前まで無線は生きていたはずだし、パイロットが死んだ今となつては確かめようはないけれど、何かしきりに通信機に向かって叫んでいたのも覚えていて。だから遅からず救助が来るものだと思っていた。しかし、もう四日間が過ぎてもそのような気配もまるでなく、ただ昼と夜だけを繰り返していた。幸いなことに、生き残ったのは自分一人であり、かき集めた水と食料の分配で争ったりせずに済んだ。そして不幸なことに、生き残ったのが自分一人であり、無線やエンジンを修理する知識など持ち合わせているはずもなく、また砂漠の民の持つ天性の嗅覚も持っていないかった。もしここから闇雲に歩き出したとして、どこか、たとえばオアシス、あるいは隊商キャラバンに遭遇する、そんな確率はどれほどだろう。

もはや終わりを知るべき時であり、頭の中、記憶を走馬灯のように流すべき時が来たのだと悟った。

ずっとさっきから、喉がひりひりと渴いていた。翼の下、機体に背中を預けて座ったまま、口の中に唾をありったけに搾り出しては飲み込んだ。唇をきつく閉ざして、乾いた風が身体の内部から水分を奪うのを防いでいた。

熱波で思考までやられたらしい。目を開いたまま、眠っているような感覚だった。敗北を認めたことで、謙虚になれたからなのかも知れない。

目の前でさらさらと砂が風に流されている。ここは自由のある牢獄だ——ふと、そんな言葉が頭をよぎった。周囲を見回しても遮るものは何一つなく、その気になれば何処へでも、何処までも行けるのに、無限の長さの見えない鎖が常に足元に絡みついて、やがて容赦なく囚人を引きずり倒すだろう。そしてこの身体をカラカラに乾かし尽くし、やがて砂へと変えてしまう。同化し、呑み込むために。空腹に腹が鳴いた。微笑。

夜になった。空気がだんだんと冷えていく。膨大な砂粒がひしめく先、西の境界を司る地平線に沿って、太陽が残した紫の光の帯がわずかに残っている。機体の翼の陰から這い出て砂の上に寝転び、天頂と正面から向き合った。

闇に星が一つ、また一つと灯りはじめた。どこか街の明かりにも似て、いくつかの思い出を呼び起こした。だがそれは星と同じようにずっと遠く、何万年光年も離れた先にあって、ぼんやり光るその思い出も、すぐに収縮してしまって他の星と見分けがつかなくなった。深く呼吸をすることに、冷えていく身体を震わせることに、空に星が生まれていく。

そして、闇は星で満ちた。息を呑んだ。静寂の中、星々は、

まるで雪のように地上に降り注いだ。

（後書き）

今回は詩のように書くことを目的としましたので、イメージ優先となってます。

もう少しポップに書きたかったのですが、ややこしくなってしまいました。

いちおう、元ネタというか、ベースは莊子の胡蝶の夢とかサン・テグジュペリの『人間の土地』あたりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7880p/>

流雪

2011年1月4日00時58分発行